三菱電機第一工場出勤風景

ママさん特派員の 県政ルポ

● 上西睦子

産業の振興による豊かな暮らしを求めて

═誘致企業が地元にもたらす効果═

県は昨年七月、県庁に企業誘致推進本部を設置し、企業誘致に積極的に取り組んでいるようです。そこで、県内の進出企業を訪問して、企業側の立地後の感想、地域住民とのコミュニケーション、地場企業との関係などについて取材してみました。

母親が望む子供の県内就職

「自分達の老後は、できれば子どもや孫達と一緒に暮したい」という母親のホンネをしばしば聞くことがあります。社会とのかかわり合いの少ない母親にとっては、子どもの成長に伴って自分の関心事も移ってゆくものです。子どもが小さいうちは育児・教育問題にしか目の向けられなかった親が、子どもが成長していざ就職する段になって初めて県内には就業の場が少ないという現実を知り呆然とします。五十七年に行われた県民意識調査の中で、「あなたは、あなた自身もしくはあなたのお子さんをどの地域に就職させたいと思いますか。」の問に実に八二％の人が県内に就職を希望すると答えています。きれいな空気・豊富な水、素晴らしい自然に囲まれた熊本県は、人情に厚く、県民の六六％の人が住みよいとしています。自然や人情が豊かであると同時に、私達の生活も経済的に豊かであって欲しいと人間誰しも願うものです。

かつて中央と地方との格差は、政治・経済・文化等全ての面においてみられましたが、航空機の発達により、距離的格差は著しく縮められ、熊本―東京間は一時間半、熊本―大阪間は一時間となり、熊本は遠隔地という人々の観念がうすらぎました。また、情報網の発達により、全国いや世界各地との情報交換も中央にいなくても不便でなくなりました。と同時に、人口の集中した大都会の過密化現象は種々の弊害をもたらしました。例えば土地価格の暴騰、環境汚染の進行等、住みにくい条件が加速されるにつれ、地方の良さが見直されてきて、昭和五十年代はまさに「地方の時代」といわれるようになりました。各企業も生産力増強のため土地価格が安く、人材もそろっている地方へと進出してくるようになりました。そこで県では、経済の振興と雇用の拡大をはかるため積極的に企業誘致に取り組んでいます。昨年は、企業誘致推進本部を設置し、活動した結果、七月以降、ソフトウェア関係を中心に企業の進出が相次ぎました。又、テクノポリスへの取りくみも積極的になされています。

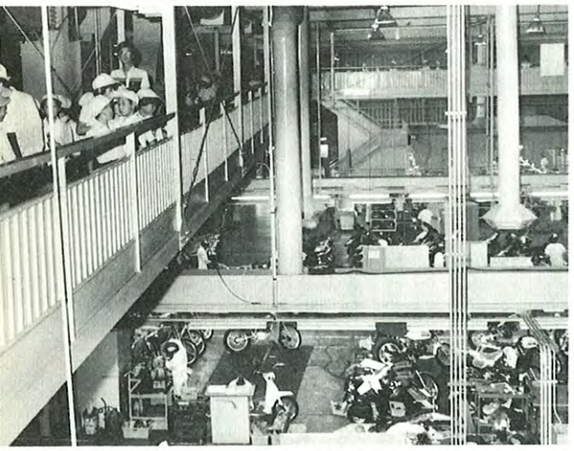
ホンダ技研
昼食風景

地域に同化した優良企業

そこで私は実際に熊本に進出した企業の中で歴史の古い九州日本電気と本田技研熊本工場及び地場企業の一つである平田機工を訪問してみました。先ず初めに進出企業二社について述べてみたいと思います。

工場を建設するに当たってどのような理由で現在地を選ばれたかをお尋ねしてみました。世界でも有数なICやLSIの生産工場である九州日本電気では、先ず労働力の問題が第一で、四十三年頃から将来は従業員（主に高校卒業の女子）二千名位の規模にする構想を立てましたが、東京近郊では、先ず無理なので、それでは出かせぎしてくれている地域に工場をもって行こうと地方進出を決めました。もちろん土地の安さに加え、当時クリーン企業誘致に積極的だった熊本県や市の熱心な誘いで現在地に決定しました。

五十一年に誕生したオートバイ専門工場である本田技研熊本製作所は、四十六年頃から新しい工場を計画しましたが①直線距離にして二キロメートルのとれる土地が必要。②水・エネルギーの確保が充分③優秀な若い男子労働力を集めることができる④交通体系が



小学生の工場見学（本田技研）